地誌研年報 2 号，1992年 3 月
ANREG2, March 1992

地方小都市近郊の指定トライブ卓越村・ガデールの森林依存経済

岡 橋 秀 典* ・ 藤 原 健 蔵* ・ 中 里 亜 夫**
友 澤 和 夫*** ・ オージャM.S. ****

Rural－Uraban Interaction and Process of Underdevelopment Based on Forest Economy in Tribal Village-Gadher, Madhya Pradesh, India

Hidenori OKAHASHI* , Kenzo FUJIWARA* , Tsuguo NAKASATO**
Kazuo TOMOZAWA*** , M.S. OJA****

Abstract This paper discusses the recent development of an Indian tribal village which mainly depends on forest economy. Main focuses are laid on occupational structure, agricultural production under drought prone environment, forest use and development policy.

The study village, Gadher is located in Guna District, northwestern part of Madhya Pradesh. This district is charactarized as the drought prone area physically and the backward area from the economic point of view. This village is adjacent to the large dense forest named Gadher Reserved Forest where forest resources are relatively well conserved. National Highway No.3 (Agra－Bombay road) goes through the village and connects to Guna City at 10km distance. In 1990, household number of this village is 97 and population reaches 522 persons. 90% of the total households belong to tribal cummunity, Sahariyas.

The main results are summarized as follows.

1) The village economy depends on forest produce. Most of Sahariyas are engaged in fuelwood collection throughout the year. They transport woods on headloads by themselves and sell them to individual household in Guna door to door. It is to be noticed that the dependency on forest economy has been enforced in last two decades. This trend is explained mainly by two factors, firstly the growth of fuelwood demand due to the population increase in Guna City and secondly the

* 広島大学文学部 広島大学総合地誌研究資料センター研究員； Faculty of Letters, Hiroshima University
** 福岡教育大学教育学部； Faculty of Education, Fukuoka University of Education, 729 Akama, Munakata－city, Fukuoka 811－41.
*** 東北大学理学部； Faculty of Science, Tohoku University, Aobayama, Aoba－ku, Sendai－980

decrease of employment in agriculture and other casual labours. Nowadays villagers confront with many difficulties in the fuelwood economy, for example, the enforcement of government regulation in forest use, the decrease of forest resources and the increasing shift of fuel comsumption to liquid oil and gas in urban households.

2) The condition of agricultural production is fundamentally bad, because of the thin soil, the prominence of unirrigated land and the small size of landholdings. After the independence, agriculture showed a tendency of development by the government's assistance. However, in 1970's, agriculture turned to decline and in recent years, no symptoms of development are found even in our field survey. Extensive land use such as grass land and fallowland accounts for the large proportion of agricultural land and very few households of Sahariyas are milking from their livestock. Sahariyas' failure to make a living as farmers is very clear and it is attributed to the decreasing amount of government loan and the easiness of cash gaining on daily basis by the fuelwood selling. Thus the village economy became unstable due to the increasing dependence on forest economy.

3) This village seems to share in the benefit of development programs due to the prominence of the sheduled tribe, Sahariyas. Noticeable improvement in the social infrastructure is the opening of primary school, the introduction of electric light and the establishment of handpumps. In spite of those goverment's effort, the situation of the village dose not change and remains underdevelopment. Villagers pointed out their problems such as 'no means of irrigation' and 'insufficient employment'. For solving the underdevelopment condition, it is requested to integrate the development policy conducted by Forest Department, B.D.O. and other offices and then to construct the selfsufficient agriculture in order to improve their health condition. In the long range, it is important to uplift their capabilities to improve their environment by themselves through education.

目　　次

はじめに
I．調査対象村落の位置と自然
1.位置
2.自然環境
II．指定トライブ（サヘリヤ）卓越村の形成
1.マディヤ・プラデーシュ州の指定トライブ
2.サヘリヤによる村落形成と拡大
3.集落形態と社会構造
III．人口増加と人口構造
1.人口の推移
2.人口構造
IV．商品経済の展開と森林依存の拡大
1.森林依存の就業構成
2.森林政策と森林利用
3.森林生産物の利用形態
V．停滞する農業生産と家畜飼育
1.土地条件と農地所有
2.農業生産及び家畜飼育の展開過程
VI．開発政策の展開と問題点
1.トライブ開発政策の展開
2.ガデールにおける開発問題
おわりに

はじめに

本研究は，地方小都市の近くに立地し，同時に広大な政府の「保存林」(Reserved Forest）に隣接する指定トライブ（Scheduled Tribes）卓越村を対象に，その近年の変貌過程を，干ばつ常習下にある農業生産，森林依存を深める村経済，開発政策の進捗といった側面から主に明らかにしようとするものである。

本研究が対象としたのは，マディヤ・プラデーシュ州（以下ＭＰ州と略称する）グナ県グナ郡ガデール村である。本村を選んだのは次のような理由による。インドでは，独立以来食料自給の達成をめざして農業・農村開発政策が実施されてきた。特に高収量品種の導入を中心とした「緑の革命」によって，急速な農業生産力の向上が見られた。こうした過程は，パンジャーブ州のような先進農業地域を成立させたが，他方でそれからとり残された後進地域や農村低所得者層の問題を表面化させることになった。そのため，政府は第４次５ヵ年計画（1969-73年）から，そうした地域間・階層間の格差の是正に力を入れ，小規模農・限界零細農・農業労働者といった低所得層への対応（SFDA/MFAL）と同時に，干ばつ常習地域にはDPAP，トライブ地区にはTADPといった後進地域向け施策が取られた。我々のねらいは，こうした後進地域の変貌過程を把握し，さらにそれと政策との関連を明らかにすることにある。この点，対象地域・ガデール村は干ばつ常習地域の外縁部に位置し，同時に指定トライブの卓越村でもあり，こうした目的にかなっている。また，本村にとどまらずＭＰ州グナ県一帯は工業化の遅れた後進地域であることも重要である。

ところで，インドでは独立後，後進的な階層の地位・生活の向上を図るため，指定カースト，指定トライブ政策が行われてきた。前者は全人口の約14％，後者は約7％を占め，合わせて全人口の５分の１がこの政策の対象となっている。ところが，指定カーストに比して，指定トライブの実態解明は必ずしも進んでいるとは言えない。インドにおいては近年この種の研究が急増しているが，詳細な村落レベルの実証研究はそれほど多くはない。ましてや，押川（1981）の指摘のように，それらのコミュニティーの存在様式に大きな相違があり，個々のコミュニティの実態を語ることなくしては「トライブ」という用語を使用することさえ無意味であるというのならば，今後大いにミクロな実証研究の蓄積が要請されよう。本研究はこの点への貢献も意図している。

もう一つ本研究がねらいとするのは，森林と開発の関係の検討である。発展途上国では今日森林の破壊が大きな問題事項となっているが，インドもその例外ではない。明確な数字ではないが，独立後30年間で森林被覆は40％から20％に縮小したと言われる（Westoby，1990,p.146）。当然こうした事態に対し森林の保全が唱えられ，そうした政

策もとられているが，その際重要なことはその対応のあり方は地域的にも多様であろうということである。とりわけ，森の民とも称されてきたインドのトライブの場合にはなおさらであろう。

以上のように，本研究は1農村の変貌過程を明らかにするとともに，上記の一般的な問題関心のいくらかに答えることも目的としている。

写真1　ガデールでの面接調査風景（1990年11月）
Photo. 1　A scene of interview survey in Gadher (Nov.1990)

現地調査は，平成元年・2年度の文部省科学研究費国際学術研究（代表者・藤原健蔵）による「インド干ばつ常習地域の農業と農村変化」の調査の一環として1990年10～11月に実施された。村では世帯毎の悉皆調査といくつかの重要な事項についての詳細サンプル調査を行い，また郡役所，県庁にて当村に関わる官庁資料の収集を行った。調査においては，アンバー大学および地元グナの大学の教官，大学生，大学院生の助力をえた。なお，当村については，1968年にモノグラフ（Village survey monographs）がBhatnagar(1968）として発行されており，これも調査対象として選択した一つの理由であった。

Ⅰ．調査対象村落の位置と自然

1.位置と概況

ガデール村は，ＭＰ州の北西部，西をラージャスターン州に接するグナ県（District）に位置する。グナ県は州の主要都市のいずれからも離れており，州内でも工業化の遅れた経済的後進地域に属する。州都ボーパル，北部の中心都市グワーリオールまでは，ともに道路距離約200Km前後である。鉄道の幹線からははずれており，狭軌のビナーコタ線が走るに過ぎないが，道路はアーグラとボンベイを結ぶ国道3号線が県内を南北に貫通しており，県内はもとより県外とを結ぶ交通の要となっている。近年，こうした交通条件と，デリーとボンベイのほぼ中間点という位置が評価され，後進地域開発の一環としてグナ市近郊に大規模な化学肥料コンビナートが建設されている。

ガデール村は，この国道3号線に面しているため，交通条件には恵まれている。しかも県都グナ（人口約6.5万人，1981年）は北東方向に10km弱という至近距離である。集落内には公的施設として小学校と森林局の警備所が立地する。商業施設は駄菓子屋と酒屋が1軒ずつあるだけであり，その他に集落の南西部にやや離れて，国道通過客向けの食堂が1

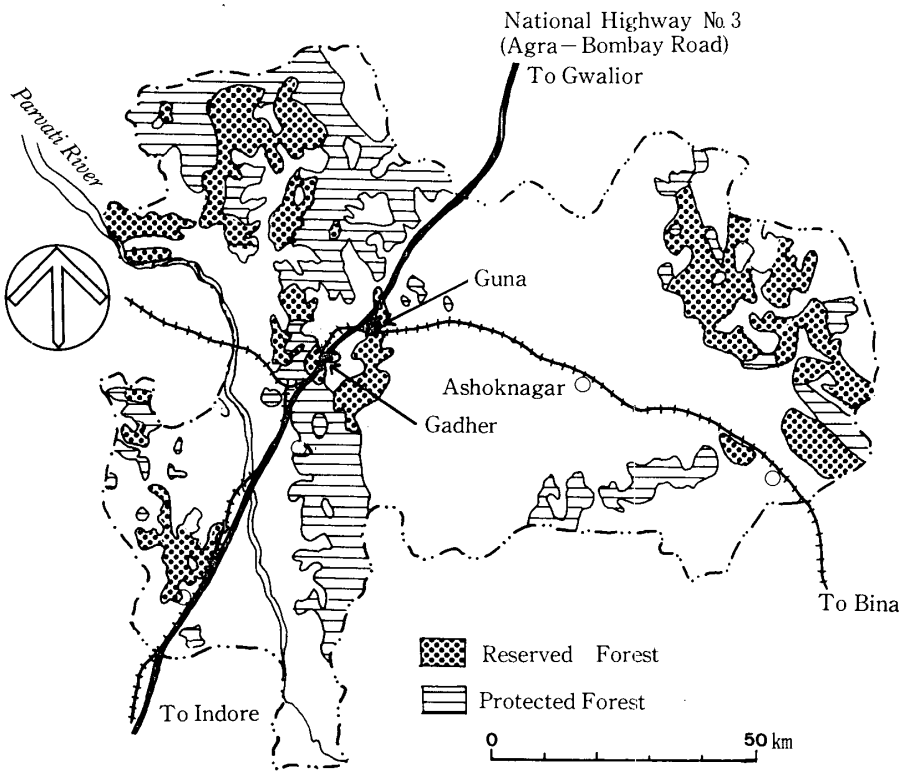

図１　ガデール村の位置とグナ県における森林の分布
Fig. 1　Location of Gadher and distribution of forest in Guna district

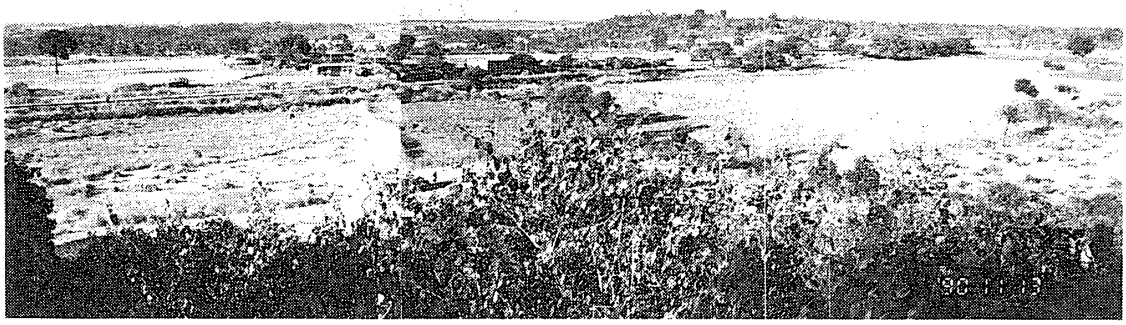

写真２　南方の丘陵部からみたガデール（1990年11月）
Photo. 2　Gadher overlooked from the southern hill (Nov.1990)
中央に見えるのがＢ集落。右方に小さく集落Ａも見える。
集落の前を国道３号線がまっすぐに走っている。

軒営業する。当村の1990年現在の世帯数は97戸であり，インドの農村では小規模な部類である。人口は522人を数える。

2. 自然環境

グナ県を含むＭＰ州北西部は，地形区分では，デカン溶岩地帯の最北端をなすマルワ高原に区分される。溶岩台地を削って発達した台地状の準平原面と，これを浅く開析したやや幅の広い谷，平地がゆるやかに交互する。ガデール村は，標高400m から600m の間に広がり，森林が最も標高の高い準平原面を占め，集落は標高500m 前後で一段低い準平原面に位置する。耕地は，この集落と同じ面及びそれよりやや低い浅い谷状の部分に広がる。耕地の土壌条件は，集落付近では石混じりの土壌で耕土に恵まれず，谷の部分は耕土はあるが粘土質で保水性に乏しい。地表面は北東部の570m を最高点として南西方向にゆったりと傾斜しており，国道と鉄道がこの西部の標高の低い部分を南北に通過している。

当地方のこうした台地上には，熱帯乾燥落葉樹林（Tropical dry deciduous forest）が広がる。グナ県においては，図１のように森林が広く分布し，特に西部には南北につながる帯状の分布地域が認められる。これらは，すべて政府の「保存林」や「保護林」となっ

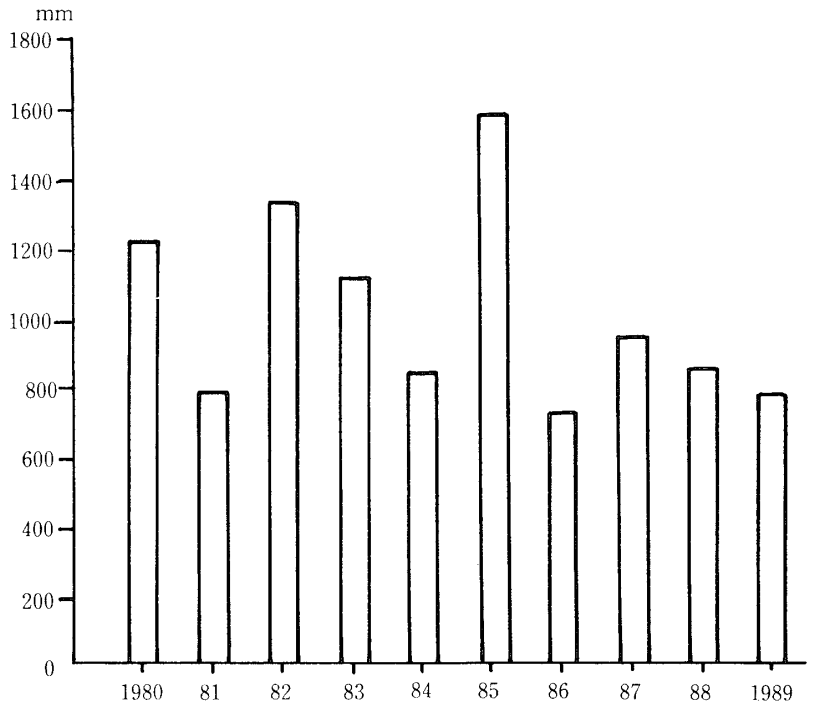

図２　年降雨量の推移(1980-1989)
Fig. 2　Annual rainfall in Guna
Source : Rainfall record of Guna tahsildar office
Note : Period of each year is from May to April

ているが，森林利用規制のより厳しい前者の分布はまとまっておらず散在的である。ガデール村の南方丘陵も，こうした森林資源が比較的よく保全された「保存林」の一つで，その広さは約24km²に及ぶ。

気候は，半湿潤気候（500～1000mm）と湿潤気候（＞1000mm）の漸移地域としての特徴を示す。年平均雨量は1100～1250mmであるが，年次による変動が激しいのが特徴である。図２は，ガデールに近い県庁所在地・グナの年降雨量の1980年代の推移であるが，多雨年は1500mm近くに達するのに対し，寡雨年は700mm程度にとどまっている。年によっては，さらに少なく600mm程度のこともある。こうした降水量の少なさと上述の土壌条件があいまって，干ばつに襲われることも多い。降雨は6月中旬に始まり，７，８月に最も多く，９月まで続く。気温は，５月と６月に最高気温が40°Cをこえ，12，１月には最低気温が10°Cを割る。

II. 指定トライブ（サヘリヤ）卓越村の形成

1. ＭＰ州の指定トライブ

インドにおいて指定トライブに属するとされる人々は，1981年現在で5,163万人，総人口の7.8%に達する。割合からすると１割にも満たないが，その人口の絶対数の大きさと広範な分布からインド農村においては決して見過ごせない存在と言えよう。

この指定トライブは，1950年の憲法に端を発し，指定カーストとともに「保護的差別」（Protective discrimination）の対象とされ，地位の向上が図られてきた。雇用や教育における保留（Reservation）をはじめとする独自の施策が実施されてきた。指定トライブはこうした政策上の呼称であって，人類学的に「トライブ」なるものが明確に定義されているわけではない。それは，イギリス植民地時代の行政用語を受け継いでいる（押川，1981）。インド社会では通常彼らのことをアディヴァシー（元から住んでいた人々）と呼び，彼らもまた自らをそのように名乗ることが多い。ヒンズー教徒の間では，かれらは密林の居住者であり，文明化されていない，宗教心のない，先天的に下層におかれる民族と考えられている（Dilip, 1990）。

指定トライブが特に密度高く分布する地域は，インドの最東部とインド半島中央部に東西に伸びる帯状の山地地域である。前者は，指定トライブの構成比率が80%を越えるような純然たるトライブ地域であるのに対し，後者は50%を上回る地域があるものの，それ以下の地域が広範に広がる混在地域である。ＭＰ州は，この後者のかなりの面積を占め，全人口に占める指定トライブの割合は23%に達している。もちろん，州内部でかなりの地域差があり，東南部はバスタール県をはじめトライブ比率がきわめて高いのに対し，西部は

10%以下が多い。我々の対象としたグナ県は後者に含まれる。

ＭＰ州の指定トライブ数は46を数える。トライブによって人口規模の差異はきわめて大きく，Gond の約380万人，Bhil の約160万人のようなきわめて大きなものから，10人に満たない小トライブまで見られる。その内，主なものは表１の通りである。その中で，本研究の対象村に居住するサヘリヤ（Sahariyas）は約20万人を数え，数の上では州内で６番目に位置する比較的人数の多いトライブである。かれらは，州の北西部に卓越するトライブで，主に Shivpuri, Guna, Morena, Gwalior の各県に分布する。その名称サヘリヤは，虎の仲間（a companion of tiger）を意味するとされ，そこからもかれらが本来森の民であったことが推察される。しかし，今日居住の場は森の外へ移っているものが多く，その理由としては，他のカーストとの接触，森林の伐採，雇用の利便，政府による農地の分配，ローンの利用可能性，森林の競売などがあげられている（Bhatnagar, 1968）。また，これ以外に森林の開墾も無視できないものがあると推測される。このようなことから，森林から遊離して，石切り労働者や農業労働者などの日雇い労働者化が進んでいる。そこから，サヘリヤは，自然資源が枯渇し，農地の土壌も貧弱な地域に居住するトライブとして位置

表１　マディヤ・プラデーシュ州の主要トライブ
Table 1　Major tribes in Madhya Pradesh

No.	Name of the Tribe (Most popular name)	population in 1971	Literacy percentage	District mainly found
1	Gond	3,779,547	8.61%	Most of districts
2	Bhil	1,618,786	3.69	Jhabua,Dhar,Ratlam, Khargone,Khandwa
3	Kol	477,730	4.73	Rewa,Shahdol,Jabalpur, Mandla,Satna,Panna,Bastar
4	Kawar	410,743	14.35	Raigarh,Surguja,Bilaspur
5	Oraon	370,652	15.64	Surguja,Raigarh
6	Korku	207,912	4.54	Khandwa,Betul,Chhindwara
7	Sahariya	205,427	1.68	Shivpuri,Guna,Morena, Gwalior
8	Baiga	176,934	4.51	Shahdol,Mandla,Sidhi, Bilaspur,Durg
9	Halba	173,374	19.05	Bastar,Durg,Rajnandgaon
10	Bharia	147,071	5.27	Jabalpur,Chhindwara, Shadol,Sidhi,Narsinghpur, Mandla,Seoni,Surguja, Bilaspur,Raigarh

Source : Tewari (1984)
Tribes whose population are over 10.0000 are shown.

づける見方もある（Tewari, 1984）。また，1901年センサスでAnimistsに分類されていたものが，1931年センサスではそうではなくなっており，ヒンズー化のため早くからその文化的独自性を失ってきたと考えられる。サヘリヤは，生態系との関係でも，経済的にも，また文化的にもトライブとしての独自性を失いつつあるのが現状のように思われる。

なお，MP州は，第5次五ヵ年計画期に，前農業的技術レベル，識字率の低さ，停滞あるいは減少する人口の3点から，州内で6トライブを特別な発展の努力を要する後進的トライブ（Primitive tribes）として指定したが，サヘリヤもその中に含まれている。

2. サヘリヤによる村落形成と拡大

ガデール村はサヘリヤの卓越村として特徴づけられる。現住全世帯の9割弱，84戸がサヘリヤに属する（表2）。かれらは，元来森の民であったとされるが，1800年代のはじめに近隣の森から移住し，この村を作ったとされる（Bhatnagar, 1968）。Ramkhediと称されるかつての集落所在地は，現住地から東に急坂を2～3㎞登った丘陵の頂上部の森林の中にある。我々もこの地を訪ねることができたが，その際平坦な無樹林地と宗教儀礼の遺跡を確認した。かれらがこの集落を放棄したのは，国道の開通とそれによる森林伐採等の雇用の増加，さらに水の便の悪さのためと考えられる。もちろん，こうした森林からの脱出はガデール村民に限らずサヘリア全体に当てはまる傾向であったが，時期的には比較的早い部類ではなかったかと考えられる。こうして集落の形成後，後述の人口動態にみられるように世帯数，人口が急速に増加し，その間1800年代後半にラージプトが，また第2次大戦後ジャートが来住して，サヘリヤの単一ジャーティ村から，現在のような若干の他ジャーティを含んだ村落の形成が行われた。

表2　ジャーティ別世帯数と人口（1990年）
Table 2　Household and population by *jati* in Gadher, 1990

Jatis	Household	Population	Male	Female
Sahariyas	84	454	243	211
Jats	6	36	19	17
Rajputs	4	24	10	14
Others	3	8	5	3
Total	97	522	277	245

Source : Censns of India (1941-1981) and Field survey in Nov. 1990

3.集落形態

当村は，国道に沿った三つの集落からなる。図３に各集落の家屋配置図を示した。各集落の位置関係は後掲の図７を参照されたい。グナに最も近い集落Ａでは，サヘリヤの世帯は11に過ぎず，それに近接して道路沿いに区画の大きい上位ジャーティ集団8世帯の住居がまとまって分布する。ここには小学校も立地している。集落Ｂには森林局の警備所があり常駐の職員もいるが，居住するのはサヘリヤだけで，44世帯を数える。このクラスターは三つの内最も規模が大きいが，さらにその外縁部に他村からの近年の来住者の世帯をも含むという他には見られない特徴をもつ。集落Ｃはサヘリヤ29世帯とＳＣ１世帯からなる。ここにはサヘリヤのための寄宿学校が一般世帯の一部を借りて設置されている。この集落に近接してヒンズー教の寺院があり僧侶１名が居住する他，やや離れた南方にイスラム教の寺院がありここにも１名常住する。

集落形態の特徴は，いずれのサヘリヤ集落も広場の空間を有し，そこにニームの木が植えられていることである。Ａは広場がやや不整形であるが，他ではきわめて明瞭である。特にＣ集落では広場を中心に家屋がまとまって配置され，また地割りでも広場を中心とした放射状パターンがみられ，計画的な集落形成がなされたことが予想される。各集落の形成時期は詳らかではないが，かれらの信仰するBhumiya神が集落Ａに祭られていることから，この集落がもっとも古く，その後に集落Ｂが形成されたという見方もある（Bhatnagar, 1968, P.13)。ただし，残念ながらモノグラフでは集落Ｃに言及されていないので，この点をさらに追究するのは困難である。もし集落Ｃが集落Ａ，Ｂより新しいとすれば，先の集落形態と併せて計画的な定住策による形成と考えることも可能であろう。

以上のように空間的にサヘリヤと他のジャーティ集団とは分離されている。この両者は居住面だけでなく，社会的にもあまり結び付きを持たず，サヘリヤの一部が上位ジャーティ集団の農業労働者となるといった雇用面の関係が中心である。しかし，サヘリヤ自体の社会的な統合性もそれほど強くないようである。それは，独自のカーストパンチャーヤトをもたないことにも現れている。そうした特徴を示すのは，都市への近接性，商品経済の浸透，生産（森林生産物の採取）における個別性などと関わると考えられる。にもかかわらず，人口の村外への転出は少ない。むしろ，森林に関わる所得機会が豊富なので，それを求め新たに他村からサヘリヤ世帯が流入するほどである。

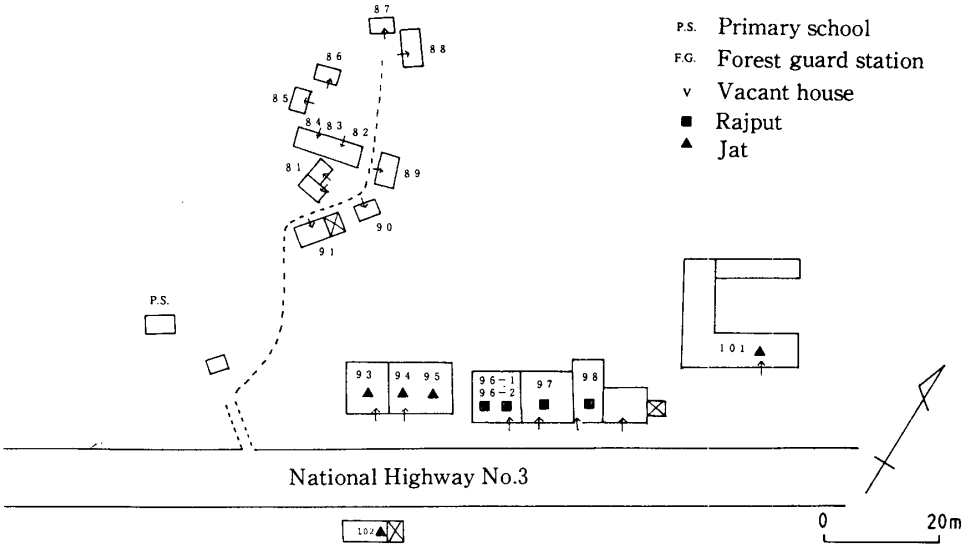

図3-A　ガデール村の家屋配置－集落A
Fig. 3－A　Household distribution in Gadher, Hamlet A

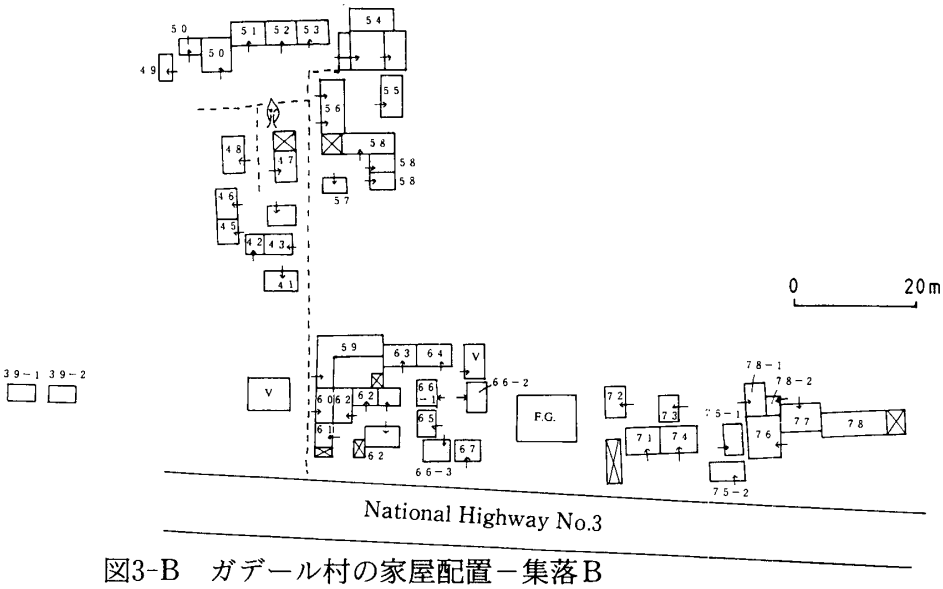

図3-B　ガデール村の家屋配置－集落B
Fig. 3－B　Household distribution in Gadher, Hamlet B

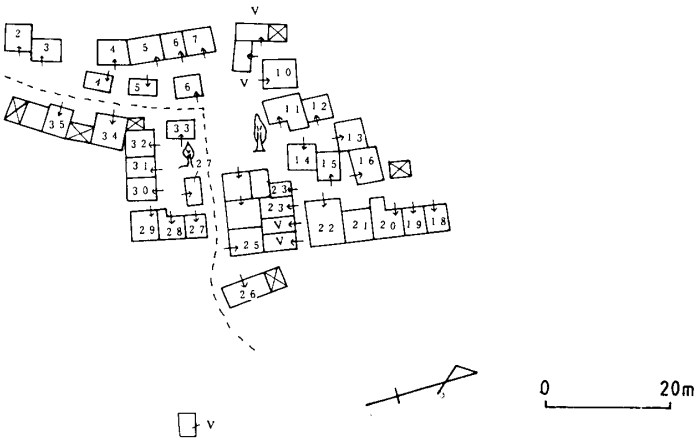

図3-C　ガデール村の家屋配置－集落C
Fig. 3－C　Household distribution in Gadher, Hamlet C

III. 人口の増加と人口構造

1.人口の推移

この村の人口は，1911年にはわずか90人（19世帯）を数えるに過ぎなかった。サヘリヤが1800年代初めに森林から出てこの地に住み着いて以降，しばらくは人口の増加がさほど大きくなかったものと推察される。ところが，1990年現在の人口は522人であり，1911年からの約80年間に5.8倍と，大きく増加したことになる（表3）。人口推移のパターンをみると，こうした増加が必ずしも一様でなかったことが窺われる（図4）。1951年頃を境にして，それ以前（第1期）は人口の増加と減少が相半ばする変動の激しい不安定な人口推移を示していた。それに対してそれ以降は一貫した増加傾向に変わっているのである。

第1期の人口の増加は，基本的には道路や森林での雇用の増加によるものであった。しかし，当時の人口は，農業や定期的な雇用に従事し，常住的性格の強い人口と，仕事をもとめて流入してきた一時的滞在人口の二つのタイプによって構成されていた（Bhatnagar, 1968, p.2)。後者の人口は仕事の如何によって再移動する浮動的な性格を有しており，それがこの時期の年次間の変動を大きくした一つの理由であろう。

第2期に入ると一貫した増加傾向となる。それはこの村の人口の定住性が高まったことを意味する。独立後，政府によって新たにサヘリヤに土地が分配され農業生産の基盤が形成されたこと，ジャートが新たに土地を取得して村内に定着したことなどがこの動きと関係する。また，この期間にも仕事等を求めた村外からの流入がみられたことも見過ごせない。1961年の時点ですでに，この村の総人口305人の内，110人，すなわち約3分の1は出生地が村外であった。女性の他村からの婚入は一般的なので男子だけに絞ってみると，それでも134人中村外出生者が30人，5分の1強に達していた。このように村外から，特にグナ県内のそれからの流入人口が人口・世帯の増加に寄与していたことがわかる。我々が調査した1990年現在でも，全世帯の内，1960年以降来住した世帯が全体の14%に及んでい

表3　人口と世帯数の推移（1941-1990年）
Table 3　Population and household change in Gadher, 1941-1990

Item	1911	1921	1931	1941	1951	1961	1981	1990
No. of households	19	21	59	30	43	65	86	97
Total population	90	100	196	155	159	305	450	522
Males	45	53	107	87	85	164	226	277
Females	45	47	89	68	74	141	224	245
Sex ratio	1000	887	832	782	871	860	991	884

Source : Census of India(1941-1981) and Field survey in Nov.1990

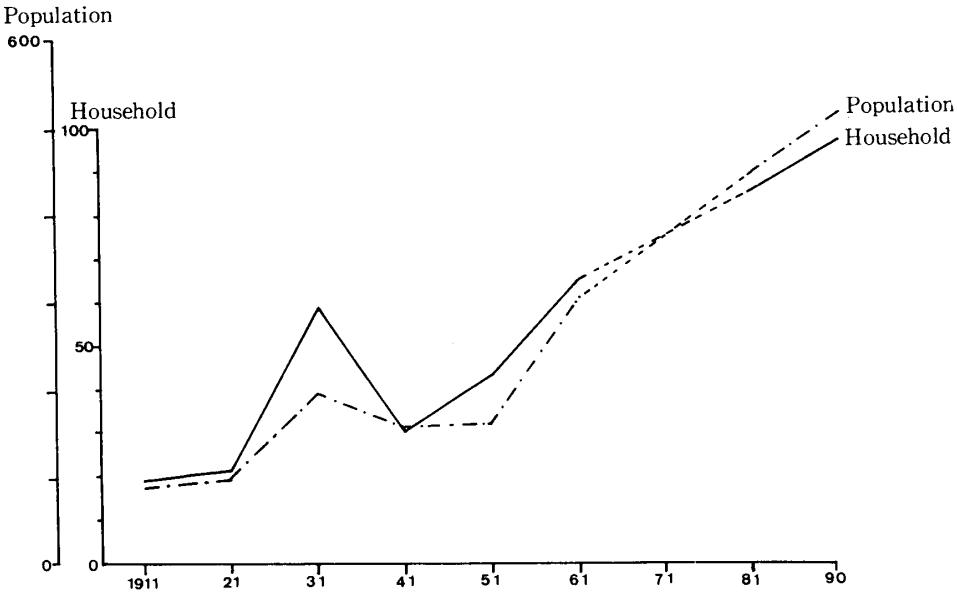

図 4　人口と世帯数の推移
Fig. 4　Population and household change in Gadher
Source : Census of India(1911～1981)
Field survey in Nov. 1990(1990)

た。表 4 によれば，その全部がグナ県内から流入したサヘリヤであり，流入理由は半分が仕事をあげ，次に多いのは結婚である。実際彼らの多くが薪の収集・販売に携わっていることから，この村のこうした就業機会が人口流入の要因と考えることができる。

1971年の人口データは不明であるが，近年は人口の伸びが弱まっており，1981年から1990年の間には16%増加したに過ぎない。これは州や県のレベルよりも低い数値であり，社会増加による人口増加という要素は弱くなってきていると推察される。

以上から，本村の人口は幹線道路と森林への近接性から多くの労働者の来住によって増加してきたと考えられるが，近年はそうした流入が少なくなり人口の増加はやや鈍化しているといえよう。

表 4　1960年以降の他村からの転入世帯数とその転入理由
Table 4　Present households imigrated from other villages after 1960 in Gadher

	Total Household	Reason			
		Job	Marriage	Relative	No answer
1960-1969	2(1)	1		1	
1970-1979	4(4)	2	2		
1980-1990	8(5)	4	1		3
Total	14(10)	7	3	1	3

Source : Field survey in Nov. 1990

2.人口構造

1990年の人口の年齢構成は，明瞭なピラミッド型を呈する。1961年のそれと比べると，幼少年層の増加が著しく裾野の部分が広がっているのがわかる（図５）。1961年の幼少年人口が36％であるのに対し，1990年には40％にのびている。それに比べて60歳以上の老齢人口は，4.6％から4.8％へとほとんど変化がない。ただ男子の場合，1961年には60歳以上がわずか4人に過ぎなかったが，1990年には14人に増え，しかも70歳代の長寿者がわずかながらみられるようになった。

性比は，1981年を除くと，一貫して女性より男性が多い。男子1000人に対し800から900の間であり，これは県や州の値と比べても男性比が大きい（表３）。その理由は，先述のようにこの村で特に仕事を求めて流入する人口が多かったことと関係すると思われる。

世帯規模は，サヘリヤでは4–6人規模の中規模世帯が最も多く，3人以下の小規模を併せると7割近くになる（表５）。その多くは核家族的性格を有している。しかし，一部には10人以上の大規模なものもみられる。絶対数は少ないもののラージプトではやや家族規模が大きい方に傾いている。サヘリヤの場合，森林生産物の採集に依存する現状からすれば，大規模家族形成の必要は必ずしもないといってよいのかもしれない。

現在の識字率は男子で40.8％，女子で10.2％であり，小学校が1970年代初めに設置されたこともあって，向上してきている（表６）。それは1961年の識字率男子5.8％，女子0％と比較すれば明らかである。特に現在の30歳代の層から下の向上が著しい。ただし，これももっぱら男子に当てはまることで，女子ではいまだ学齢期児童でも４分の１程度の就学率であり，男子と比べて大きな格差がみられる。こうした女子における不就学児の多さは，両親が薪の収集・販売で外出することの多いこの村の特質と密接に関わっている。彼女らの多くは，幼い妹や弟の世話をまかされ，また時には薪の収集をも手伝う。

図５　人口ピラミッド（1961，1990年）
Fig. 5　Population pyramid in Gadher,1961 and 1990.
Source : 1961 : Census of India (1961)
1990 : Field survey in Nov. 1990

表5　家族員数からみた世帯規模（1990年）
Table 5　Size of household by members of family in Gadher, 1990

Jati	Small (1−3)	Medium (4−6)	Large (7−9)	Extra Large (more than 10)
Sahariyas	22(26.2%)	38(45.2%)	14(16.7%)	10(10.9%)
Jats	2	2	0	2
Rajputs	1	1	1	1
Others	2	1	0	0
Total	27(27.8%)	42(43.3%)	15(15.5%)	13(13.4%)

Source:Field survey in Nov.1990

表6　年齢階級別の識字率（1990年）
Table 6　Literacy percentage by age groups in Gadher,1990

単位:%

Sex \ Age group	6 - 9	10-14	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-	Total
Male	55.9	84.4	64.3	39.6	50.0	28.6	23.1	7.1	40.8
Female	25.0	29.2	20.0	11.4	3.7	0	0	0	10.2

Source : Field survey in Nov. 1990

それゆえ，識字率の向上には，この村の経済基盤の変革も必要とされるのである。

Ⅳ．森林依存の商品経済の拡大

1.就業構成

当村の就業構成は森林に大きく依存しており，しかもそのほとんどが自営的な薪の採取・販売であるところに特徴がある。そして，そうした就業はサヘリヤによって担われてきた。

センサスモノグラフ（Bhatnagar, 1968）によって，まず1960年頃の様子を見ておこう（表7）。1961年の就業構成では，主業においては一般労働が50%弱を占め最も多く，それに森林生産物採取が25%で続き，農業は14%に過ぎなかった。また副業では，農業が最も多く3割を占めるものの，森林生産物採取がほぼこれと並んでいた。これからもわかるように，当時は一般労働への就業機会が多く，その内容は政府・民間の建設労働（特にP.W.Dによる道路工事），農繁期の近隣の町村での農業労働，請負業者による森林伐採労働などであった。そして，この時期すでに，ジャートとラージプトの農業専従に対し，サヘリヤは農業労働，森林労働，建設労働，森林生産物の収集・販売など多様な就業の組合せという，顕著なジャーティ間の差異が見られた。

約30年後の1990年になると，就業構造はかなりの変化を見せる（表7）。まず，森林生産物への従事は，1961年には主業，副業相半ばしていたものが，1990年には圧倒的に主業

表7　主業・副業別の就業人口（1961，1990年）
Table 7　Number of workers by primary and secondary occupation in Gadher, 1961 and 1990

Year	Primary(Main) Occupation				Secondary(Subsidiary) occupation			
	Culti-vator	General labour	Forest produce	Other	Culti-vator	General labour	Forest produce	other
1961	25	87	46	23	51	38	46	39
1990	23	28	146	21	49	22	11	4

Source : 1961 Census Monograph and 1990 Field survey

が中心となる。これを主業とする者の数は，46名から146名へと3倍以上に増加した。他方，一般労働は，主業，副業ともに減少しており，特に主業とする者は，87名から28名へと約3分の1に減少した。これは，1961年時点でこの種の雇用機会を主に提供していた道路工事，森林伐採などが大幅に減少したためと推測される。農業従事者がその後伸びなかったこと，それ以上にこうした雇用労働が減少したことが，薪の採取販売を中心とする森林利用への傾斜を急速に強めていった理由と考えられる。

このように，現在のガデールの就業構造を特徴づけるのは，森林に依拠した就業の卓越である（表8）。村の大多数を占めるサヘリヤはもっぱら薪の採取と販売で生計を立てて

表8　ジャーティ別の就業（主業）構成（1990年）
Table 8　Main(Primary) Occupation by *jati*, in Gadher, 1990

Occupation	Sahariyas	Jats	Rajputs	Others	Total
Self-Employed					
Agriculture	16(6)	4	3	0	23(6)
Fuelwood selling	146(65)	0	0	0	146(65)
Service	0	1	1	4(1)	6(1)
SubTotal	162	5	4	4	175(72)
Employed					
Agriculture	12(6)	0	0	0	12(6)
Construction work	5	0	0	0	5
Forest work	2(1)	0	0	0	2(1)
Transport	0	0	1	0	1
Service	3	0	0	0	3
Government service					
Teacher	3	0	0	0	3
Officer	0	1(F)	1(F)	0	2(F)
Servant	2	2	1	0	5
Labour	9	0	0	0	9
Sub total	36	3	3	0	42(7)
Others	1	0	0	0	1
TOTAL	199	8	7	4	218(79)

Note : Figures in bracket mean female worker. F in branket mean Forest Department
Source : Field survey in Nov. 1990

いる。森林で採取した燃料用薪をグナまで頭上運搬で運び，個々の家庭に訪問販売するのである。199人の就業者中，73％に当たる146人がこの業に従事している。しかも，その5割弱は女性によって占められており，一般にインド農村で女性の就業率が低い中でのこの数値は注目に値しよう。これに対し，他のジャーティ集団では薪の生産に従事するものは全く認められない。つまり，森林に依存したこの職業は伝統的にサヘリヤによって担われてきたのである。

写真3　頭上運搬でグナへ薪を運ぶ途中のサヘリアの若者（1990年11月）
Photo .3　Young Sahariyas transporting fuelwood to Guna by headloading (Nov.1990)

ジャートとラージプトは，元来農耕集団であり，自営農民としての性格を保持している。いずれも半数近くが農業に従事する。それ以外のジャーティでは，もっぱらサービスであるが，そのうち2名はヒンズーおよびムスリムの僧侶であり，他はスウィーパーである。

サヘリヤは農業にも従事するが，自家農業のそれはわずか8％にすぎない。むしろ，農業労働者として雇用されるものや建設労働，さらに一般労働に従事するものが多く，この種の雇用が併せて14％に達する。ただ，驚くべきことはサヘリヤで3名の教員がみられることであり，これは政府の保留（Reservation）によるものと推定される。他方，ジャートやラージプトでは，政府の役人（森林局）が見られる。

表9は，この村の農林外雇用者の一覧である。就業地はガデールとグナが多く，それぞれ3分の1を占める。しかし，グナでの就業先も建設関係が多く，基本的にガデールと大きく異ならない。わずかに店員2名が目立つ程度で，グナに近い割には，その労働市場の影響を受けていない。賃金は，月収1000ルピーを超えるのは教員，役人，一部の運転手だけであり，全体の4分の1程度にすぎない。他は，P.W.D. が700ルピーを超えやや良好であるものの，一般労働は日給15～20ルピーで薪の収集販売と変わらない水準である。いずれにせよ，ガデールの農外雇用機会は限られており，時系列的にも改善の傾向が認められない。

2.森林政策と森林利用

サヘリヤの依存する森林は，政府の「保存林」であり，それゆえかれらの森林利用は政府の森林政策に大きく規定されている[1)]。

インドの森林政策は，独立後も基本的にイギリス統治下のそれを踏襲してきた。イギリ

表9　Gadher 村の雇用者の概要
Table 9　Individual data of employed person in Gadher

番号	個人の属性			現在の就業状況				前職
	年齢	世帯内の地位	学歴	職業の名称	就業地	月収（ルピー）	就業年次	
1	63	H.H.	M3	店舗経営	Gadher	300	1965	農業
2	50	H.H.	IL	ドライバー(P.W.D.)	Guna	850	1968	labor
3	50	H.H.	P5	ドライバー(P.W.D.)	AshoknagarT.	1,200	1960	fuelwood
4	50	H.H.	P5	森林警察の長	Gadher	1,500	1965	なし
5	45	H.H.	P3	建設(P.W.D.)	Guna	750	1981	labor
6	45	H.H.	P5	ドライバー(Govt.)	Guna	1,200	1989	民間ドライバー
7	45	H.H.	M3	守衛(森林局)	Guna	590	1978	鉄道
8	43	H.H.	H3	小学校教員	KumbhrouT.	1,590	1971	なし
9*	40	H.H.		楽器演奏				
10	40	H.H.	P5	建設(P.W.D.)	RaghogarT.	976	1978	fuelwood
11	40	H.H.	S	チョキダール	Gadher	360	1972	なし
12	40	H.H.	P5	labor(P.W.D.)	不定	20/日	1966	なし
13	40	H.H.	H3	女学校校長	Bamori	1,600	1970	fuelwood
14	40	H.H.	P5	家畜病院の pion	Guna	600	1970	なし
15	40	H.H.	C3	森林警察の長	Bamori	1,400	1972	なし
16	35	H.H.	M1	labor（ダム建設）	ダム(Guna T)	20/日	1983	fuelwood
17	35	H.H.	IL	森林局の守衛	Gadher	500	1980	農業
18	35	H.H.	S	建設(P.W.D.)	RaghogarT.	700	1975	fuelwood
19	35	H.H.	P5	labor	Guna	15/日	1985	農業
20	35	H.H.	P4	labor（建設）	不定	15/日	1970	なし
21	32	H.H.	P5	自転車店店員	Guna	600	1976	なし
22	30	H.H.	IL	建設(P.W.D.)	Guna	700	1981	fuelwood
23	28	H.H.	H3	小学校教員	Manoo	1,300	1983	なし
24*	27	H.H.	IL	ドライバー(P.W.D.)	Gadher 近く			
25	27	S	P5	森林局の守衛	Gadher	311	1990	labor
26	25	S	P4	自転車店店員	Guna	400	1988	他の自転車店
27	25	S	IL	labor	Gadher	15/日	1982	
28	25	S	IL	labor	Gadher	20/日	1982	
29	25	H.H.	S	labor	不定	15/日	1985	fuelwood
30	20	S	IL	食堂経営	Gadher	1,500	1984	なし

*はサンプルサーベイを行っていない
就業地域で，T. のついていないのはグナ Tahsil 内である
H.H. : Head of household,S : Son

スは大量の森林を伐採すると共に，他方で森林の管理のために森林官庁の設立，森林法の制定を行った。1864年のインド森林局の設立，1865年の最初の森林法の制定がこれである。この森林法は1878年により包括的な整備されたものへと改訂された。すなわち，森林は「保存林」と「保護林」，「それ以外の林」に分けられ，それらの管理と経営の権限が森林局に一元化されたのである。森林局は，計画的収穫，移動耕作の禁止，放牧・木材・その他の林産物の採取の制限，中止を押し進めていった。特に森林資源の保存が強く企図された「保存林」では利用の制限がきびしく，それまでの森林利用が大きく規制され，森林に

依存して生計を立てていた人々の生活に大きな影響を与えることになった。特に，森の民とされるアディヴァシーの人々に与えた影響は大きいものであったと推察される。その後，1927年にこの森林法は一部改訂され，現在までインド森林政策の基本法として機能し続けてきた。ただし，森林の管轄責任はこの間に中央政府から州政府へ移行した。これは1934年のインド政府法により州議会が成立したためであり，この体制は1976年まで続いた。独立後，地域開発や都市化によって，森林資源への圧力は増大してきたが，これへの対応がみられたのは，ようやく1980年の森林保全法（Forest conservation act）の制定によってであった。これによって，中央政府は州とともに森林管轄権を行使できるようになり，森林破壊の速度が弱まったとされる。トライブと森林との関係で重要なのは，1976年のＮＣＡ（インド国家農業委員会）のレポートであり，森林破壊の元凶として，トライブの役割が指摘された。これに対し，むしろ森林破壊における政府の責任を追求し，トライブの生活から森林の保全を考えていこうという動きも見られる。

ところで，「保存林」では地元住民の利用が完全に排除されているわけではない。*Nistar* Right と呼ばれる一種の入会い権が存在する。ＭＰ州では法律（The M.P. Forest Rules, 1960）によって自家消費目的に限り次のような利用を許可している。1)農具や，家屋・家畜小屋の新築・改築用に認められた場合の木材，2)木材にはならない枯木，3)特に言及された場合の枯れたあるいは生の竹，4)*rusa, khas, sabai* 以外の草，5)*air* のもの以外のとげやそだしば，6)*tendu* を除く葉，7)保留されていない木の樹皮，8)地表の丸石，砂，粘土。ガデールにおいてもほぼこのような森林利用が住民に認められてきた。

州政府森林局が実施するガデールにおける具体的施策は以下の通りである。

①Tendu の葉の採取許可と買い上げ

このために森林局の Fad（収集センター）が設けられる。1990年には14,110Rs. が代金として支払われた。

②植林

これまで50ha の植林が行われ，1989年までの総支出額は100,000Rs. に達する。この作業には村人が１日19Rs.（1989年）で雇用された。

③国道沿いの植林

1989年までに12,100Rs. 支出。

④森林局の警備所（Check post）の設置

1988年に設置され，Army Police Force が常駐する。

⑤樹木管理のためのマーキング作業

⑥農民のためのすき制作用の木を有料で供給

⑦自家消費と生計用に，頭上運搬に限り賦課金なしで薪を搬出する便宜を供与

このように，政府の「保存林」では森林利用が一部認められているものの規制が厳しく，村民には薪や *Tendu* の葉の採取などのごく限られた利用が許されているに過ぎない。特に1988年以降は，警備所が設けられ，また木材の伐出が政府に一元化されたことなど規制強化の動きがみられる。他方，村民の雇用は植林作業が中心であり，かつて木材の伐出が盛んに行われた時期に比べるとかなり乏しくなっていると言える。

3.森林生産物の利用形態

森林生産物に依存する人々の典型的な年間就業カレンダーは，主に通年の薪採取，4月から5月にかけて10日～20日間程度集中的に行われるたばこ（*Bidi*）の原料，*Tendu* の葉の採取，11月に10日間前後の飼料用草の刈り取りで構成される。この他，*Achar* という果実が3月に採取される。薪の採取は青年層以上で従事者が固定しているのに対し，*Tendu* の方は期間が限定されるので子供も含む家族総出で行われる。狩猟はほとんど行われず，経済的意義を持たない。うさぎが多数生息するにもかかわらず，かれらは斧しかもたず，弓のような狩猟道具を持たないので捕獲できないという。

薪の収集販売はサヘリヤ世帯の8割強で行われるが，その内1世帯2人以上従事がが過半を占め，3人以上さえ16世帯ある（表10）。このことから，かれらの生計がこれに大きく依存していることが窺われる。*Tendu* の葉の採取もサヘリヤ世帯の8割強で行われ，薪の補助的収入として位置づけられる。1961年のセンサスモノグラフでは，蜂蜜やガムの採取の存在を指摘しているが，1990年にはこれらへの従事はもはや確認されなかった。

薪の採取と販売は，次のように行われる。薪の採取と販売は日を分けて交互に行われることが多い。典型的な事例を示すと図6のごとくである。まず第1日目は約6時間かけて

表10　従事者数別にみた森林生産物の販売世帯（1990年）
Table 10　Household selling forest products in Gadher 1990

No. of worker	Fuelwood	Collection of *Tendu* leaves
1	35	26
2	24	27
3	6	5
4	5	3
5	4	4
6	0	1
7	1	1
Total	75(148person)	67(140person)

Source : Fleld survey in Nov.1990

森で薪の収集を行う。これは午前中で終わる場合もあるし，遅く出た場合は午後にまたがる場合もある。帰宅後，休憩をとった後，薪を割って揃え1包の荷を作るパッキング作業を行う。第2日目は午前4時起床，朝食の後5時頃に村を出発，頭上運搬で約3時間かけて10km離れたグナまで薪を運ぶ。到着後町の中を1～2時間かけて売り歩く。全量を販売した後，帰途はバスを利用し，午前中に帰着。午後は休憩をとる。以上が最もよくみられる基本パターンであるが，これだと1カ月計約15回の販売となる。中には1日に午前と午後2回森に出かけたり，グナで販売して帰宅後また森へ薪を集めに出かけるケースがみられる。これらの場合は1カ月の訪問回数も増え，20回程度販売可能である。また日曜市がグナで開かれるので，その日は薪を販売後市で商品を購入したり，映画などの娯楽の後帰ることが多い。とはいえ，グナへ薪を売りに出かける時間は共通して早朝であり，夕方のケースは認められない。これは後者の場合だと帰りのバスがないというのが理由としてあげられる。グナ市内では夕方にも薪販売者の姿を見かけるが，これらはより近距離の村から訪れるものと考えられる。

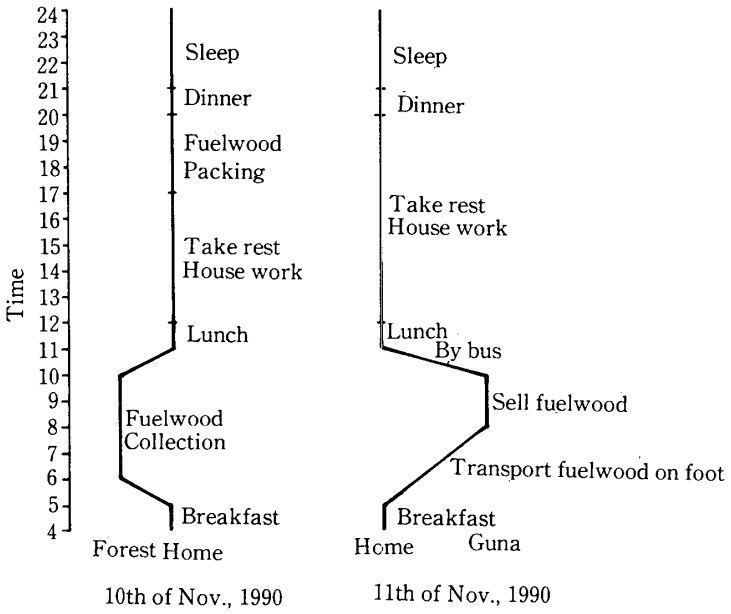

図6　薪販売者の生活時間の一例(№29世帯の主婦の場合)
Fig. 6　Daily life of a typical fuelwood seller (A case of housewife, Household No.29)
Soure : Field survey in Nov. 1990

写真4　薪採集に出かける男の人（1990年11月）。持物は斧とロープと頭上運搬用の帽子（木の葉で作製）がすべて。
Photo. 4　A man going out to collect fuelwood. (Nov. 1990)

実際にガデールからの薪販売者の数を把握するため，1990年11月18日（日）早朝にガデールからグナに入る直前の道路上で調査を行った。表11はその結果であるが，1名をのぞきこの方面からはすべてガデール村民によって占められている。ガデールから

表11　グナ市郊外のAB道路1地点を通過した薪販売者(1990年11月18日，日曜)
Table 11　Fuelwood sellers found on the road to Guna city (18th of November, 1990)

	Male	Female	Total
7:20－8:00AM	27(1)	29	55(1)
8:00－8:30AM	15	28	43
8:30－9:00AM	3	8	11
Total	45(1)	65	110(1)

Note : One Person in branket is not a villager of Gadher
Soarce : Field Survey in Nov.1990

の総数は109名で，我々の悉皆調査による薪生産者146名の4分の3に当たる。また男女別では女性が男性の1.5倍と多い。しかも女性の実数65名は悉皆調査で捕捉した数と一致しており，ふだん薪販売に従事する女性が100％この日には現れたことになる。これに対し男性ではふだん従事するものの半分強に過ぎない。それゆえ，日曜市との関係で，この日は女性の数が平日より多く現れたと考えた方がよい。時間的には午前7時半から8時半に集中し，聞き取りによる結果と一致した。森林局のグナ事務所での聞き取りでは，グナへの薪の供給は約15km圏内の約500名の村人によって行われているという。これからすれば，ガデールはグナの薪市場の約3割を占める一大供給地であると言える。

薪と異なって，*Tendu*の葉の売買は州政府によって管理されている。葉の収集期には，役人がこの村まで出向いて集荷し，州政府の公定価格で買い上げる。1969年からContractorを排し，州政府が一括購入し*Bidi*業者に専売するシステムが採用された。MP州では*Tendu*の葉の生産量はこれまで一貫して伸びており，またグナ県でも漸増傾向にある。価格的に安定しているので，有利な森林生産物と言えよう。

かれらの収入を推計するのは比較的容易である。薪1パッケージ30kgの価格は14～20Rsであり，夏季には14ルピーと安く，需要の増える冬季には20ルピー程度まで上がる。それゆえ，冬季の価格のよいときでも1カ月の収入は15回販売で300ルピー，20回販売で400ルピーということになる。それゆえ，決して日雇い労働の域をこえるものではない。しかし，日雇い労働に比べ，薪の場合は，1年間コンスタントに就業が可能であり，年間の総収入はより高くなると考えられる。もちろん，この他に*Tendu*の葉の採取があり，これは100束（1束が葉60枚）で25ルピーであった。普通の大人1人で1日100束採取できるのでこれは1日当り25ルピーでやや高い収入である。ただし日数はきわめて限定される。これからすると，1人の労働者当り，年間300×12＋25×10＝3850ルピーとなる。実際には，1戸で2人以上従事する家も多いので，1戸当りでは10000ルピーを超えるものもあると推察される。1人当りでは決して多い収入と言えないが，この種の就業機会は女性に

も可能であるので家族総働き的な体制で，何とか家計が維持されているといえよう。

こうした森林生産物に依存した商品経済への傾斜は，先述の道路や森林伐採などの雇用機会の減少と関連づけて考えないわけにはいかないが，しかしすでに1961年センサスモノグラフ（Bhatnagar, 1968）でも指摘されているように，グナ市街地との近接性ゆえに森林生産物を売って生計を立てるという志向は以前からきわめて強いものがあった。そうした中で，グナ市街地は1961年からの20年間に3.4万人も人口が増加した。このことが，一層の燃料用薪の需要増大をもたらし，この傾向に拍車をかけたとみられる。

しかし，森林生産物，特に薪の採取に依存した商品経済は多くの問題を抱えている。まず留意さるべきは，こうした採取は森林資源の枯渇に拍車をかけることである。実際。我々が森林利用について聞き取りした10名すべてが，薪の収集が以前より難しくなったと答え，その理由として森林資源の不足と採取域の遠隔化，それによる収集時間の増大をあげている。*Tendu* の場合は同一の質問に対し，７名が以前と変わらないと答えているので，この資源枯渇問題は薪の場合に特に顕著ということになる。

このことは，森林が州政府の「保存林」であり，彼らの所有でないこととも関係する。現在，Tendu の葉と薪の採取は無料で認められているが，薪は枯木のみである。当然，採取可能な薪は限られたものであろう。それゆえ，生木を切って乾燥させてから搬出するといった違法行為も行われているふしがあり，森林資源の枯渇化が懸念される要素がないわけではない。1988年にこの村の中央部に森林局の警備所が設置され，それまでの１名から20名に職員が増員され，監視体制が強化されたのもこの問題と関わっていよう。その結果，政府の森林資源保全重視とサヘリヤの経済生活の間に緊張が高まってきていると推察される。実際，薪の採取が難しくなった一つの理由は，森林局の警備そのものなのである。村人の口からは，森に来るなと言われたとか，伐採用の斧を没収されたとか，罰金を要求されたというような話がよく聞かれる。

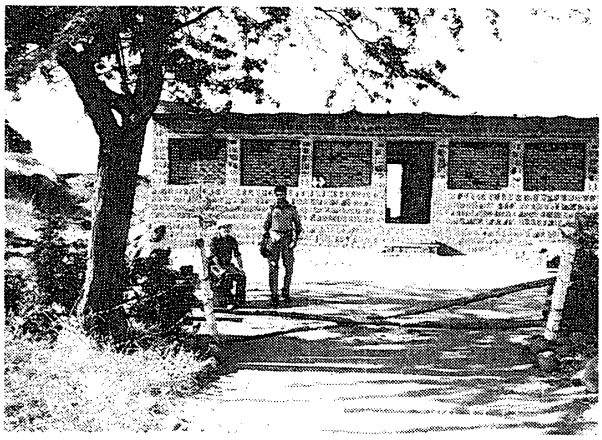

写真５　森林警備所（1990年11月）
Photo. 5　Forest guard station（Nov.1990）

しかし，薪の運搬はあくまでも頭上に限定されている。早朝，グナに向かう頭上運搬の村人の列は壮観ではあるが，その肉体労働の過酷さを考えると，こうした規制だけで問題が解決すると考えるのは安易に過ぎる。こうして，薪生産を巡る状況は徐々に厳しくなってきている。しかも，徐々にではあるが，都市住民の燃料源は多様化し，ガスや石油など化石

燃料が普及する傾向が見られる。例えば，グナではガスが1982年に導入され，1990年現在料理用ガスコネクションが7,605に達している。今後薪の需要そのものが減退していく可能性さえないわけではない。このように考えると，当村の森林依存の経済には多くの問題がはらまれている。もちろん，村人自身は今のところこうした事態に自覚的に対処しているわけではない。極めて短期的展望のもとで日々の生活の再生産が行われている。結局，こうした事態の打開を図る長期的方策としては，代替的な雇用拡大を考えざるをえない。

近年，当村の南方約30kmに大規模な化学肥料コンビナートが建設された。これはこの地域の問題解決に一つの希望の光を与えるものであろうが，これまでのところ，雇用面をはじめとして当村には何ら影響を与えていないのが実状である。

V．停滞する農業生産と家畜飼育

1.土地条件と農地所有

ガデールの農地の土地条件は，決して良好とは言えない状況にある。基本的に土壌層が薄く痩せ地であり，また一部に井戸灌漑が行われる他は天水農業である。このため干ばつ被害を受けやすく，農業の生産条件は基本的に不安定なままに推移してきた。

本村の現在の農地所有は，独立前後の土地所有変化に大きく規定されている。独立時のインド・パキスタン分割の際，近村居住のムスリム・ザミンダールの所有地がジャートの手に渡り，かれらはガデールに農民として定着した。またサヘリヤに対しても政府が若干の農地を与えた。1950年代後半に16人のサヘリヤが政府によって農地を分け与えられ，その結果1950-1951年にはたった20であった土地所有世帯が，1962-1963年には33に増えた（Bhatnagar, 1968, p.64)。こうして，サヘリヤにもある程度自給的な農業経営の基盤が整えられたのである。しかし，同じ時期に政府によって隣村の Borkheda 村に与えられたという50.5ha の土地は，すでに1960年代のモノグラフにおいてもサヘリヤ自体がその所在を知らないとしているが，今回の我々の調査でも確認し得なかった。

1990年現在の農地所有のジャーティ別構成は，全農地の６割弱をサヘリヤが占め，ジャートが２割弱，ラージプトが１割弱である（表12)。また，村外者の所有も14％近くあり，特にグナの住民によるものが目立つ。これは本村が都市に近接し，幹線道路に面することとも関係しよう。ただし，サヘリヤの農地の移動はＭＰ州のトライブ所有地の譲渡禁止の法的規制もあって少ない。1961年と比較すると，ジャーティ別所有面積割合はほとんど変わっていないが，実面積ではサヘリヤの所有地が増加した点が注目される。これは先に述べた政府の土地配分によるものである。しかし，これ以降，サヘリヤの世帯数，人口は大幅に増加したので，これが土地無し層の増加を招いている。1961年の32世帯が1990年に

表12　ジャーティ別農地所有（1981，1990年）
Table 12　Agricultural landholding in Gadher by *jati*, 1981 and 1990

Jati	1961		1990	
	Area in ha	Percentage	Area in ha	Percentage
Sahariyas	36.3	57.2%	47.7	58.7%
Jats	11.0	17.2%	15.5	18.5%
Rajputs	4.8	7.6%	7.5	9.2%
Others	0.9	1.4%		
Other villager	10.5	16.5%	11.1	13.6%
Total in Gadher	63.5	100.0%	81.3	100.0%
Land in other village	50.5		?	

Note : 12.6ha out of 47.7ha in Sahariyas holdings
belong to Govt. pattadhari on lease　15-20yrs.
Source : Cadastral Book and Village Monograph, p.64

は44世帯に増加した（表13）。土地無し層は，今日でもサヘリヤの52.4%を占め，30年前のそれと比率では大きく変わっていない。しかも，土地所有層と言えどもサヘリヤの大部分が20bigha 未満であり，その規模はきわめて零細な範囲に偏っている（表14）。これに対し，30bigha 以上の大面積所有層は，サヘリヤ１世帯，ジャート２世帯，ラージプト１

表13　土地所有規模別世帯数（1990年）
Table 13　Distribution of landholding by size and *jati*, in Gadher 1990

:bighas

Jati	No. of Landholder	0.1-4.9	5.0-9.9	10.0-19.9	20-29.9	30.0	Total
Sahariyas	44(52%)	15(18%)	15(18%)	8(9.5%)	1(1.2%)	1(1.2%)	84
Jats	2	0	0	1	1	2	6
Rajputs	3	0	0	0	0	1	4
Others	3	0	0	0	0	0	3
Total	52	15	15	9	2	4	97

Source : Field Suvvey in Nov, 1990

表14　土地無し世帯の数と構成比（1961，1990年）
Table 14　Landless households in Gadher, 1961 and 1990

Jati	Total No. of Households		No of landless households		Percentage of landless households	
	1961	1990	1961	1990	1961	1990
Sahariyas	56	84	32	44	57.1%	52.4%
Jats	2	6	0	2		
Rajputs	1	4	0	3		
Others	1	3	0	3		
Total	60	97	32	52	53.3%	53.6%

Source : 1961 Census Monograph and 1990 Field Survey

世帯によって構成され，上位カースト集団の土地所有における優越が明らかである。

2.農業生産及び家畜飼育の展開過程

これまでにみたように，今日農業は，この村の住民の大部分にとって生計上大きな意味をもたなくなっている。農業生産は，1980年代の相次ぐ干ばつなどによって後退現象が著しく，サヘリヤに遅れて定着した上位カーストの一部に，農業によって生計を立てる世帯がわずかにみられるにすぎない。これまでのところ，サヘリヤの農民化は成功したとは言いがたいというのが実状である。

独立後の1950年代から1960年代にかけて，農業は若干の展開を見せたと考えられる。農業就業者（農業労働者をのぞく）は1951年にはわずか19名であったが，1961年には56名に急増し，1963年には73名を数えた（Bhatnagar, 1968, p.63)。また，作付地も1958-59年度に107エーカーであったのが1959-60年度には137エーカーへと急増，さらに1960-61年度には154エーカーにまで増えた。また，この過程で小麦の作付の増加が見られラビー作でヒヨコマメ (Gram) を上回る第一位の作物となった。家畜飼育では、1961年に全世帯65世帯中60世帯が家畜を所有し，計86頭の牡牛が飼育されていた（表15)。これは1990年現在の牡牛の頭数44頭と比べ約２倍の数である。特にサヘリヤでは，現在の牡牛頭数19頭の4倍以上の79頭を保有していた。このような農業や家畜飼育の拡大傾向をもたらしたのは，先に述べた政府の土地配分による農地所有世帯の増加と，1950年代後半の Taccavi ローンの融資であったと考えられる。このローンは土地改良法に基づくもので，この時期に特に集中的に投資されていることがわかる（表16)。牡牛が最も多く，井戸，種子，牝牛，化学肥料の順で用いられた。現在を大きく上回る家畜数，所有世帯の多さも，このローンが効を奏していたように思われる。ただし，この時期以降表16のようにローンの額は急減した。わずかに種子のみが継続的に購入されたに過ぎない。それはこうした農業の展開がローンの側面からは必ずしも持続しえなかったことを意味する。

現在の農業の状況は，明らかに1960年前後に比べ後退している。就業構成のところで既

表15　家畜頭数の推移（1961，1990年）
Table 15　Livestock in Gadher, 1961 and 1990

Year	HH with Livestock	Number of Livestock			Average per rearing HH		
		Cows	Bullock	Buffalo	Cows	Bullock	Buffalo
1961	60(56)	50(39)	86(79)	3(0)	7.6(1.1)	6.8(2.3)	1.5(0.0)
1990		47(22)	44(19)	28(0)	2.6(2.0)	2.6(1.7)	0(0.0)

Note : In(　): Sahariyas
Source : Field survey in Nov.1990

表16　タカビローンの推移（1955－1974年）
Table 16　Amount (remained in 1982) of *Taccavi* loan borrowed by villages of Gadher from 1955 to 1974

:Rs.

	Galf	Ox	Seed	Fertilizer	Well	Total
1955－1959	230	845	529.4	216.57	650	2470.97
1960－1964	174	80	497	0		751
1965－1969		150				150
1970－1974			808	29.12		837.12
Total	404	1075	1834.4	245.69		4209.09

Note : Besides these figures, Ox(53Rs.) and Seed(81Rs.) were borrowed but with no information about the year
Source : Tahsildar Office,Guna

に見たように，農業就業者の数はわずか23名（内サヘリヤ16名）に過ぎず，これに農業労働者の12名を加えても，35名に過ぎない。1986～1989年の作付面積（草地を除く）も，26.6～38.3ha(67～96acre）であり，1958-59年度の水準をかなり下回っている（表17)。

現在の主な作物は，カリーフ作ではトウモロコシ(Maize)，ジョワール(Jowar)，ラビー作ではヒヨコマメ(Gram)，小麦(Wheat)であり，中でもトウモロコシとヒヨコマメの作付が多い（表17)。これらはいずれも自給的性格が強いものである。1986年から1987年の間にジョワールの大幅な減少がみられ，ごく最近ではカリフ作はトウモロコシが中心となっている。この背景としては，この時期の干ばつの影響が想定される。草地としての粗放な

表17　作目別収穫面積（1986－89年）
Table 17　Crop-wise landuse pattern in Gadher, 1986-1989 (ha)

Crops	1986－87	1987－88	1988－89
Kharif	43.1	33.1	28.6
Maize	9.4	10.0	9.6
Jowar	10.3	1.0	1.0
Soybean	0.42	0.42	0.64
Sesame	0.21	0.8	1.0
Subtotal	20.3	12.3	12.2
Grass	22.8	20.9	16.4
Rabi	14.8	26.0	14.6
Gram	7.0	18.4	9.9
Wheat	4.0	5.0	4.0
Wheat－Gram	1.8	1.9	0.0
Masoor	1.95	0.8	0.75
Fallow land	28.3	31.4	38.5
Less than 2 yrs	1.2	0.2	10.6
2 to 5 yrs	7.3	6.6	1.8
More than 5 yrs	19.9	24.6	26.0

Source:Cadastral Book.

利用が多いことも注目すべき点であろう。これはもっぱら飼料用草の販売に当てられ商品性が強いのが特徴であるが，農業生産からみれば，問題の多い動きであろう。さらに重要なのは，休閑地の多いことであり，1986年時点で28ha あったが，それ以降さらに増加傾向がみられる。しかも，5年以上の休閑地が増加しており，農地の耕作放棄が進んでいる。図7は，作付の空間パターンを示したものであるが，カリーフ作のとうもろこしは集落の近辺でおもに栽培され，ラビー作のひよこまめや小麦は集落からやや離れた浅い谷の部分に作付られている。これはⅠ章で述べた地形や土地の土壌条件を考慮したものと言える。すなわち，雨量の少ないラビー作物は，より低地の保水のよい耕土の多いところが選ばれていると推察される。草地や休閑地の多くは，山つきの土地条件の悪いところが中心となっている。

家畜は牝牛，牡牛，水牛，山羊が飼養されている。1961年との比較では牡牛が半減し，牝牛は変わらず，牝水牛が大幅に増えている（表15)。家畜飼養世帯はサヘリヤでその割合がきわめて低く，牡牛で11世帯，飼養世帯率13%，牝牛で13世帯，同16%に過ぎない（表18)。これに対し，ジャートやラージプトでは半数以上が牛を飼育する。牡牛飼養世帯が少ないことは，サヘリヤが農業生産の基礎手段を欠いていることを意味する。また，村全体で搾乳中の牝牛が15頭（内サヘリヤ5頭)，搾乳中の牝水牛が11頭（同0頭）ある

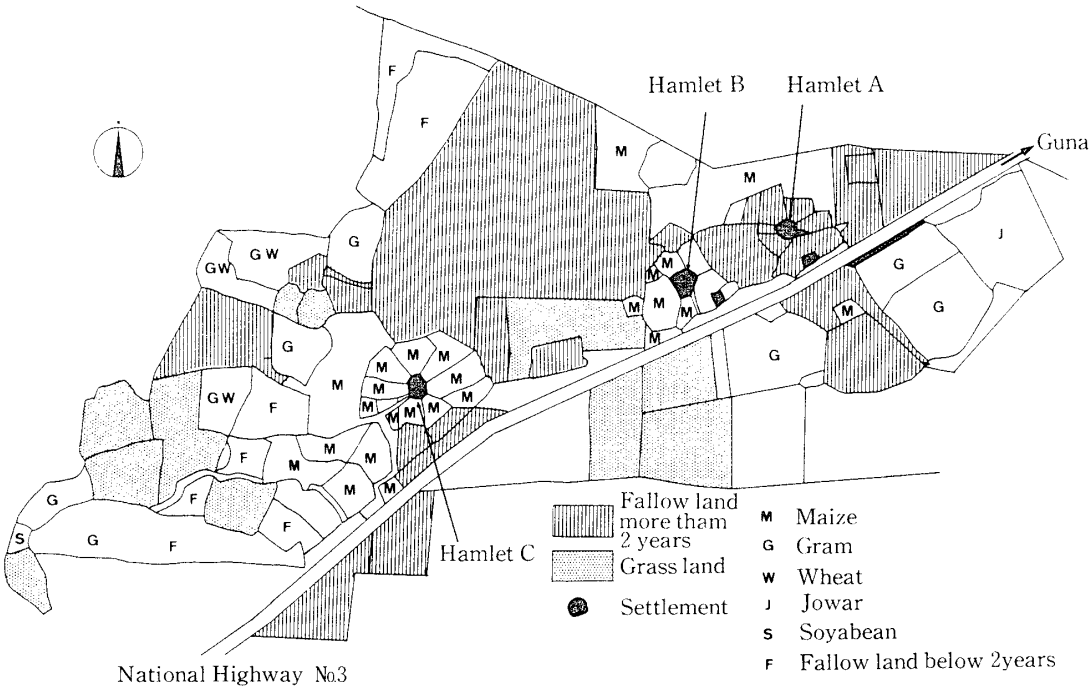

図7　ガデールにおける農業的土地利用(1989-90)
Fig. 7　Agricultural landuse pattern in Gadher (1989－90)
Source : Cadastral map and Cadastral book

表18　ジャーティ別家畜飼養世帯数（1990年）
Table 18　Livestock rearing household by *jati* in Gadher, 1990

Jati	Ox.Bullock	Cow	He-Buffalo	She-Buffalo	Goat
sahariyas	11	13	0	0	11
Jats	4	3	0	3	1
Rajputs	2	2	1	1	0
Others	0	0	0	0	0
Total	17	18	1	4	12

Source:Field survey in Nov.1990

表19　ジャーティ別家畜飼養頭数（1990年）
Table 19　Livestock population by *jati* in Gadher, 1990

Jati	Cattle			Buffalo			Goat
	Ox, Bullock	Cow	Total	He	She	Total	Total
Sahariyas	19(17)	22(5)	41(22)	0	0	0	94
Jats	20(12)	21(8)	41(20)	0	24(11)	24(11)	45
Rajputs	5(4)	4(2)	9(6)	1(0)	3(0)	4(0)	0
Others							
Total	44(33)	47(15)	91	1(0)	27(11)	28	139

Note : Figures in brackets show working or milking
Source : Field survey in Nov. 1990

が，全搾乳世帯数は11世帯にすぎず，ミルクの生産量はきわめて少ないと言える（表19）。もちろん，こうした特徴はもっぱらサヘリヤに当てはまるものであり，サヘリヤの搾乳世帯総数はわずか5世帯，かれら世帯数の１割にも満たないのである。これがかれらの栄養状態の悪さの一因を成していると考えてよいであろう。ただ，サヘリヤで見過ごせないのは，山羊の飼育であり，近年政府の補助等で増加している。山羊は村全体で12世帯，139頭であり，内サヘリヤが11世帯で94頭を有する。山羊の中には搾乳されているものもあるので，サヘリヤにとって今後重要な意味を持つと言えよう。

以上見たように，この村の農業は1960年前後に比して明らかに後退している。その後退のプロセスは資料の制約上十分に明らかにしえなかったのであるが，結局はサヘリヤにおける農業定着の失敗を物語っている。彼らの土地が痩せ地であり，干ばつ被害を受け易かったこと，政府のローンが1960年代以降縮小したこと，購入された牛が病気で死んだり盗まれたりしたことなどが考えられる。また1980年代に入って，州政府の農業政策がより商品作物を重視するようになったことも，農業条件が悪く，自給的性格の強い当地域にとってマイナスに作用したとも考えられる。しかし，それら以上に大きいのは，農外の現金収入の容易さであろう。森林と同時に都市に近接しているため，薪の販売という手取り早い現金収入の機会があったことが，サヘリヤの農業離れを促進したとも言える。いずれにせよ，

都市との関わりが増大する中で，この村は消費経済の中へより深く取り込まれ，それがまた薪の販売や日雇い労働による現金収入獲得に拍車をかけ，かれらの経済基盤を不安定化させる結果となっている。

VI. 開発政策の展開と問題点

1. トライブ開発政策の展開

ＭＰ州は，既に述べたようにＳＴの割合の高いところであり，州政府内にトライブ福祉局が設けられ，独自のトライブ開発政策が行われてきた[2)]。その主な事業内容は，奨学金の給付，寄宿制学校の設立，種子・化学肥料などの給付の他，総合的なものとしてサヘリヤ開発プログラム（Saheriya Vikas Programme）がある。この事業は1984-85年度から始まったもので，I. R. D. P. を基礎にトライブ福祉局の独自の財源が付加された形で行われている。グナ県における実績は表20の通りである。学童への衣服や教科書の給付といった教育関係，ハンドポンプ，井戸，道路などの生活環境の整備，さらに家畜の給付などの農業振興事業と多岐にわたっている。金額的に特に多いのは，飲用水のためのハンドポンプの設置である。

当村でも，指定トライブが卓越するため，こうした政策の成果を見ることができる。小学校はすでに1970年に設置されていたが，1980年代に入って，ハンドポンプ２本の設置（1983），各世帯への電気の導入（1985）などインフラ面での改善がなされてきた。国道に面し，グナに近いという位置的条件と相まって，この県のサヘリヤ集落の中では相対的に恵まれた生活環境を備えていると言えよう。この点は，他村からのサヘリヤの流入がみられること，また，トライブ福祉局によるサヘリヤの寄宿制学校が設けられたことにも反映されている。

1988年開設のこの学校は，まだ独自の校舎を持たず，村人の住居の一角を借り受けて開かれている。小学校課程だけで，教師が2名，生徒の定員が60名である。グナ郡だけでこの種のサヘリヤ寄宿制学校は６校あり，小学校課程のみのものから中学校，高校，大学課程まで持つものもある。ここには現在他村からの子供，20名弱が学んでいる。実生徒数が定員を大きく割っているのは，生徒が帰郷した後戻ってこないケースが多いからだと言う。教師の他に，料理人2名，水汲み２名，守衛1名，用務員１名が雇用されており，この内ガデールからは3名が従事している。

ガデールにおける1980年代の B. D. O. の支出内容は，表21の通りである。I. R. D. P. が全体の70％と最も大きい割合を占め，その他は建設作業が不定期ながらやや大きい。1983年以降は年金も少額ながら支払われている。

表20　グナ県におけるトライブ福祉局の支出
Tabie 20　Expenditure of Tribal Welfare Department in Guna District

:Rs.

Item	1984-85	1985-86	1986-87	1987-88	1988-89	Total
Supply of animals (Cows. Bullocks. Buffaloes.Goats. Hens)	111,780			100,000		211,780
Supply of agricultural instruments and medicine (bullock cart. medicine. etc.)	43,000					43,000
Fisheries training and equipment		92,778			3,125	95,903
Educational facilities (building etc.)	23,200		12,600		4,125	39,925
Assistance to students (Supply of textbook, uniform and blanket)	76,370	10,000	65,200	10,000	98,465	260,035
Handpump		308,003	20,000		1,460,000	1,788,003
Repairing of well and tank				58,000	15,000	73,000
Storage dam of water					351,000	351,000
Medical facilities				5,000		5,000
Housing scheme				6,000		6,000
Village road					65,000	65,000
Aid to grampanchayat				14,000		14,000
Cultural program			1,129			1,129
Pot (for taking meal)					7,200	7,200
Other expenditure			1,175			1,175

Source : Tribal welfare Department, Guna

I. R. D. P. の内訳は，支出額のもっとも大きい1986-1987の年度だけに限られるが，表22の通りである。山羊が最も多く，牛車がこれに続き，この二つで全体の８割近くを占める。これらは，楽器を買った演芸を職とするS.C.の１世帯を除き，すべてサヘリヤへの給付である。当村での山羊の増加がこうした公的な政策によるものであることは明らかである。ただし，こうした I. R. D. P. のローンは定常的に支出されるのではなく年次間の違いが大きいことへの留意が必要である。1980年代では，1981～1983年の間と，干ばつ後の1987-1988年度の資金投入が大きい。

表21　ガデール村へのB.D.O.の支出（1980－1990年）
Table 21　Expenditures of B.D.O. to Gadher, 1980-1990

:Rs.

	1980 -81	81 -82	82 -83	83 -84	84 -85	85 -86	86 -87	87 -88	88 -89	89 -90	90 -91	Total
1 Cnstruction work	17,100	–	–	–	–	–	–	10,000	12,500	–	4,000	46,600
2 Samajik Surkha Pension Yogna	–	–	–	1,440	1,440	1,440	1,440	1,440	1,440	1,440	840	10,920
3 Under I.R.D.P. Scheme Loan to Poor Persons below Poverty		24,000	39,000	1,000	4,150	–	–	57,200	–	5,000	–	139,350
4 Taj Sem Yojna (Rural Youth self-employment Program)	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2,250	–	2,250
Total	17,100	24,000	39,000	2,440	5,590	1,440	1,440	68,640	13,940	8,690	4,840	199,120

Source : Block Development Office

表22　ガデール村へのI.R.D.P.ローン（1987－1988年）
Table 22　I.R.D.P Loan Provided to Gadher villagers during 1987-88

:Rs.

	No of Households (*Jati*)	Loan amount for each Household	Total Amount	Subsidy Amount
Goat	8(Sahariyas)	3,000	24,000	12,000
Bullock cart	4(Sahariyas)	4,800	19,200	9,600
Kirana shop	3(Sahariyas)	3,000	9,000	4,500
Music instrument	1(Mahatar)	5,000	5,000	1,667
Total	16	15,800	57,200	27,767

Note:This table is details of item No.3 in above Table
Source:Block Development Office

2.ガデールにおける開発問題

こうした開発政策を経て，村民は，自らの生活がどう変わったと評価しているのであろうか。表23によれば，村民の約4割がこの10年間によくなったとし，3割弱は変わらないとし，残りの3割は悪くなったとしている。この数字をどう見るかは難しいところであるが，少なくとも3割がはっきり悪くなったとしている点が注目されるべきであろう。

村民が挙げる問題事項は，表24の通りである。特に多いのは，灌漑設備の欠如（19名），恒常的な雇用の不足（16名），農地の不足（15名），診療所のないこと（11名），農具の不足（10名）などである。そのほか，政府のローンが利用できないことも指摘されている。表にあげられた問題事項は，この村の低開発を余儀なくしている諸問題を的確に指摘している。しかし，こうした問題点は，個々に検討されるだけでは不十分である。灌漑が整備されれば，即この村の農業問題が解決されるとは必ずしも言えない。この点，食料の不足という指摘は重要であり，栄養不足をはじめ村民が置かれている極度の貧困状況が如実に

表23　最近10年間におけるガデール村の変化に対する村民の評価
Table 23　Asessment of villagers to the change of condition during this 10 years, Gadher

Jati	Better off	Same	Worse	No answer	Total
Sahariyas	31(36.9)	25(29.8)	24(28.6)	4(4.8)	84(100.0)
Jats	3	1	1	1	6
Rajputs	3	0	1	0	4
others	0	1	0	2	3
Total	37(38.1)	27(27.8)	26(26.8)	7(7.2)	97(100.0)

Source:Field survey in Nov. 1990

表24　村民によって指摘されたガデール村の問題事項
Table 24　Development problems pointed by villagers in Gadher

No.	Development Porblems	No. of person
1	No means of irrigation	19
2	Insufficient opportunity of permanent job	16
3	No or less agricultural land	15
4	No hospital	11
5	No or insufficient agricultural instruments	10
6	Rising prices	8
7	No availability of government loans	7
8	Lack of bull and ox	7
9	Lack of food(especially fresh vegetables)	6
10	No pacca house	6
11	Less income	5

Source : Field Swrvey in Nov. 1990

表されている。それゆえ，まずもって，その日限りの商品経済の循環から脱却し，一定の農業の自給基盤を高める努力が必要と思われる。その点，山羊の導入は大家畜より意味があるだろうし，野菜の自家栽培も検討に値する。また，貧弱な住宅環境などの指摘も無視できない。悪い生活環境と栄養不足が結びつきあって，村民の罹患率を高め，それが診療所の開設を強く望むことにつながっているのである。結局，薪に依存した商品経済はかれらのその日暮しの生活を保障しはするが，決して資金の蓄積を可能とするものではない。その結果，むしろ食料や健康という生活の基本部分が犠牲にされることになっているのである。

他方，村民，特に大多数を占めるサヘリヤにとって最も問題であるはずの森林資源の問題は指摘されておらず，森林資源の経済的利用と保全との間の矛盾について，村民の認識はきわめて弱いように思われる。同時に，森林を管理している森林局も，トライブの生活を十分考慮していないという問題がある。またトライブの開発を担当しているトライブ福祉局も，森林資源をはじめとした経済基盤についての配慮が弱い。このように，単に住民

だけでなく州政府の行政のあり方にも問題が見出される。こうした状況を改善するためには，B. D. O. や森林局，その他公的機関の政策を地域的により統合していくことが望まれ，また長期的には，教育の普及を通じて指定トライブの環境の理解と制御能力を向上させていく方向が必要と考えられる。

写真6　保健所の医師による子供たちの健康状況チエック（1990年11月）
Photo. 6　Medical check for children by the doctor of the Medical Department（Nov.1990）

Tewari (1984, p.i) では，サヘリヤの基本問題は，かれらの住む地域で自然資源が枯渇しつつあり，かれらの所有する土地の土壌が痩せていることであり，それゆえ，これらの人々の訓練，指導，組織的支援，他の職業への転換と，自然資源の回復がかれらの経済を改善するであろうと，きわめて的確な認識を行っている。それゆえ，緊要の課題は，そうした解決方策を実現しうる行政的，あるいは組織的対応であると言えるのではなかろうか。

おわりに

本研究は，地方の小都市グナに近接し，また広大な森林（政府の「保存林」）に隣接する指定トライブ（サヘリヤ）卓越村・ガデール村を対象にして，その近年の変貌を，森林依存の村の経済，干ばつ常習下の農業生産，開発政策の展開といった側面から検討してきた。

ガデール村の経済は，自営的な薪の採取・販売を中心に，森林に大きく依存しているところに特徴がある。グナまで薪を頭上運搬し個別訪問販売するのであるが，それはもっぱらサヘリヤによって担われており，近年それへの依存度は一層高まる傾向にある。こうした森林依存の商品経済への傾斜は，需要をもたらすグナ市街地との近接性とそこでの人口増加によるが，さらに道路や森林伐採などの他の雇用機会の減少や農業生産の後退との関係も考えられる。こうした薪依存の経済活動にも問題があり，資源の不足と採取域の遠隔化，森林資源保全を目的とした森林局の監視強化，都市での化石燃料の普及による需要減退の懸念などが明らかとなった。

この村の農業は，サヘリヤにおける農業定着を企図した政府の補助によって1960年前後には発展の傾向を見せた。しかし，近年は作付面積，家畜頭数も減少しており後退現象が著しい。わずかにサヘリヤ以外の上位カーストで農業生産が維持されているにすぎない。それゆえ，サヘリヤの農民化は成功したとは言いがたいというのが実状である。その理由

としては，彼らの土地が痩せ地であり，干ばつ被害を受け易かったこと，政府のローンが1960年代以後縮小したこと，購入された牛が病気で死んだり盗まれたりしたことなどがあげられる。また1980年代に入って，州政府の農業政策がより商品作物を重視するようになったことも，農業条件が悪く，自給的性格の強い当地域にとってマイナスに作用したと言えよう。しかし，それら以上に大きいのは，農外の現金収入の容易さであろう。上述の薪の販売という手取り早い現金収入の機会があったことが，サヘリヤの農業定着を阻害したとも言える。いずれにせよ，都市との関わりが増大する中で，この村は消費経済の中へより深く取り込まれ，それがまた薪の販売や日雇い労働による現金収入獲得に拍車をかけ，かれらの経済基盤を不安定化させる結果となっている。

指定トライブが卓越するため，ガデール村はこれまで開発政策においても一定の配慮がなされてきた。電気の供給，飲用ハンドポンプの設置，サヘリヤ寄宿学校の開設などの成果がある。しかし，村民はいまだ多くの問題を抱えており，灌漑設備の欠如，恒常的な雇用の不足，農地の不足，診療所のないこと，農具の不足などを問題として指摘している。しかし，これらの問題は個々に検討するだけでは不十分である。この村が有している貧困化の構造をどう変えるかという観点から全体的に捉えられなければならない。灌漑の整備や農地の拡大が重要なことはもちろんであるが，かれらの栄養不足，罹患率の高さを改善するためには，まずその日限りの森林依存の商品経済から脱却すること，そして農業の自給基盤を高める努力が必要と思われる。大家畜よりも山羊の導入が，また商品作物よりも自給用の野菜の栽培が検討に値する。もちろん，貧弱な住宅環境の改善も無視できない。悪い生活環境と栄養不足が結びつきあって，村民の罹患率を高めているからである。こうした農業基盤の整備とともに，森林に依存した日稼ぎから脱却するため，より安定的な代替雇用の創出が急務である。これは森林資源の利用と保全との間の矛盾が高まっている中では特に重要な点である。

こうした当村を取り巻く問題状況の解決のためには，行政の対応が重要なことは言うまでもない。森林を管理している森林局が，森林の保全だけでなくトライブの生活を視野にいれた施策を実施すること，トライブの開発を担当するトライブ福祉局がトライブの貧困化構造をふまえた施策を行うことが課題となる。そして，トライブ地域の開発に関わるB. D. O. や森林局，その他公的機関の政策が地域的により統合されていくことが望まれる。また長期的には，教育の普及を通じて指定トライブの環境の理解と制御能力を向上させていく方向が当然必要と考えられる。

本村の現状は，森林に依存する指定トライブが都市の商品経済の波の中に包摂されたとき，いかなる展開を示すか，その一つの姿を示しているといえよう。トライブというと，

ややもすると「森の民」，といった自然の中での相対的に自給的な生活が思い浮かべられることが多いであろう。しかし，インドの指定トライブの実態は実際にはきわめて多様であり，本研究の対象としたガデール村のようにすでに都市の商品経済に巻き込まれ，その中で様々な問題を抱えるに至った事例も存在する。かれらは，生態系との関係でも，経済的にも，また文化的にもトライブとしての独自性，自立性を失いつつあるのが現状である。それゆえ，本稿の事例はインドのトライブ問題，開発政策にも資するところがあるかと思われる。

なお，本稿では，サヘリヤの社会・文化的側面，ガデール「保存林」の森林生態系について十分な把握をなしえなかった。指定トライブの問題を考えるためには，こうした点の検討も重要であることを断わっておきたい。

本稿の概要は，1991年度日本地理学会春季学術大会において発表した。

注

1）ここでの森林政策の記述は，Khator(1989), Agarwara(1990), Westoby(1990) を参照した。
2）インドの部族開発政策については，Hasnain(1988) を参照。

文　献

押川文子 (1981)：独立後インドの指定カースト・指定部族政策の展開，アジア経済XXII－1，pp.26～45.
Agarwara, V.P. (1990) : *Forests in India.* Oxford & IBH Publishing,New Delhi,338p.
Bhatnagar, K.S. (1968) : *Census of India* 1961, *Vol.* VIII (*Madhya Pradesh*), *Part* VI *Village Survey Monographs* No. 10 (Gadher, Tahsil & District Guna). New Delhi, Government of India.112p.
Dilip, H.(1990) ：アディヴァシ：インドの指定部族，ジョージナ・アシュワース編（辻野功ほか訳）『世界の少数民族を知る事典』明石書店，pp.88～90.
Hasnain,N. (1988) : *Tribal India Today.* Harnam Publication, New Delhi, 336P.
Khator,R. (1989) : *Forests－the people and the Government.* National Book Organisation, New Delhi, 133p.
Tewari,D.N. (1984) : *Primitive tribes of Madhya Pradesh-Strategy for development,* New Delhi, Government of India, Ministry of Home Affairs, Tribal Development Division.
Westoby, J. (1990)『森と人間の歴史』（熊崎実訳）築地書館，275p.